

生命をめぐる社会問題について、人間だけではなく動植物を含めた生命の尊さを理解し、自分なりに考え、生命を大切にしようとする主体的な態度につながる心情を育てる。

■ 展 開

	学習活動	授業者の発問や指導内容と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 生命が大切だと感じた経験を想起する。	○ 皆さんは、どんなときに生命が大切だなと感じますか。 ・ 朝起きたとき、朝日を浴びて気持ちがいいから。 ・ 食事のときに、「いただきます」という気持ち。 ・ 身近な人や飼っている動物が亡くなったとき。 ○ 教科書 p114, 115 を見て、いなくなったら困る生き物はどれでしょうか。それはなぜですか。 ・ どの生き物も必要だから生きている。どの生き物も自然界には必要。	・ どの生き物もなくてはならない存在であり、世の中のすべての生きとし生けるものには、かけがえのない生命が宿っていることを確認する。
展開	2 教材「いのちを考える」を読み、話し合う。 3 「生命を大切にすること」ということはどういうことかを考える。	○ 「なぜ、生命を奪ってはいけないのか」、自分なりに考えてみよう。 ・ 生き返らせることはできないから。悲しむ人がいるから。二度と戻ってこないから。 ・ 生命は自分一人のものではないから。 ○ 「では、動植物の生命は奪ってもいいのか。」 ・ 本当は奪ってはいけないが、奪わないと私たちは生きていくことができない。 ・ 動植物の生命も人間の生命も同じだから、奪ってはいけない。命の重みは同じだと思う。 ○ 「いのち」のどんなところが同じなのでしょう。 ・ 生き返らせることはできないこと。 ・ 一つしかないこと。 ・ かけがえのないもの。 ・ 重さは同じ。 ◎ 「いのちなしに生きられない」とは、私たち人間にとってどういうことだろう。（中心的な発問） ・ 私たちは多くの生命をいただいて生きている。 ・ 支え合って生きている。 ・ 普段の食事でなく魚や野菜を食べているが、その大切な生命に生かされている。	・ 教材「いのちを考える」を範読する。 ・ タブレットに個人の考えを入力し、3, 4人のグループで話し合う。（☆ICTの活用） ・ 人間の生命だけではなく、動植物を含めた生きとし生けるものの生命を尊重することの大切さや、生命は平等に与えられたかけがえのない存在であることに気付かせる。 ・ グループでの話し合い後、全体で共有し、生命について確認する。 ・ 人間の生命も動植物の生命も同じかけがえのない存在であることを共通理解する。 ・ 動物のさつ処分数や、年間の食肉消費量などを提示し、生命をめぐる社会問題にも触れる。 ・ タブレットに個人の考えを記入し、全体で意見を交流する。（☆ICTの活用） ・ 生きとし生けるものには生命があり、それがないと生きられないことや、人間は多くの生命をいただいて生きていることに気付かせる。
終末	4 本時の学習で感じたことや考えたことをまとめる。	○ 今日の学習を通して、生命を大切にすることは改めてどういうことだと思いましたか。 ・ 自分や友達の生命の大切さはもちろん、食事のときに多くの生命に支えられているという思いで、感謝でいただくこと。 ・ 人間のことばかりではなく、地球全体の生命を考えて、SGDsの活動など身近なことを進んでやっていこうと思った。	・ 先人の言葉を提示し、本時の学習を振り返る。 ・ アンケート機能を用いて、振り返りを行う。（☆ICTの活用）

■ 評価

- ① 動植物を含めた生きとし生けるものの生命の尊さについて、多面的・多角的に考え、自分なりの考えをもつことができたか。
- ② 生命をめぐる社会問題について自分自身の問題としてとらえ、かけがえのない生命を大切にしようとするということについての考えを深め、課題意識をもつことができたか。

■ 主題設定の理由

生命を尊ぶことは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の現れである。自他の生命を尊ぶためには、まず自己の生命の尊厳を深く考えることが大切である。また、生きていることの有り難さに深く思いを寄せることから、自己以外のあらゆる生命の尊さへの理解につながる。

近年、社会に目を向けると、自他の生命を軽んじるような話題や動植物の生命が脅かされる問題が多い。また、大災害によって一瞬のうちに生命を奪われてしまう出来事も後を絶たない。そのような中で、中学生の時期は「かわいそう。」「悲しい。」という思いにさいなまれたとしても、自分自身としての問題として捉え、限りある生命をどのように大切に生きていくかまで考える者は少ない。人間の生命のみならず、身近な動植物をはじめとする生きとし生けるものの生命の尊さに気付かせ、生命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念をもてるようになることが重要である。

そこで、自分が今ここにいることの不思議（偶然性）、生命にはいつか終わりがあること、その消滅は不可逆的で取り返しのつかないこと（有限性）、生命はずっとつながっているとともに関わりあっていること（連続性）などを手掛かりに、生きとし生けるものの生命を尊びながら共に支え合い生きるということの大切さに改めて気付かせたい。そして、生命を大切にすることはどういうことかを考えさせ、かけがえのない生命を尊重し生きようとする主体的な態度につながる心情を育てたいと考えた。

■ 指導の工夫

【ICTの活用と話し合いの工夫】

タブレット端末に個人の考えを入力した後、画面上で共有し、3、4人のグループで話し合いを行う。「なぜ、生命を奪ってはいけないのか」を考える際は、3、4人のグループでスライドを共同編集し、スライド上でやりとりを行い、話し合う。また、中心的な発問の場面では、アンケート機能を用いて、学級全体で共有し、問い返しをしながら深めていく。特に、話し合う際には、自分の考えを発表するだけではなく、共感したり納得したりした友達の考え又は疑問をもった考えを理由とともに紹介し、ねらいについて深められるようにする。

【生活経験を補完し、考えを深めるための教材の工夫】

道徳科の時間は、生徒自身が生活経験を想起しながら、教材の主人公の生き方を通して、「人間についての深い理解と、これを鏡として行為の主体としての自己を深く見つめることとの接点に、生き方についての深い自覚が生まれる」（中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編）ようにする時間である。しかし、Dの内容項目については、生活経験や今までの知識だけでは十分に深めることは難しいと考える。そこで、中心的な発問をする前に、主題に関わる資料を提示し、補完することとした。具体的には、日本における年間の犬や猫のさつ処分数（令和2年度 犬4059頭、猫19705頭）、年間国内屠畜頭数（令和3年度 牛肉：105万頭 豚肉：約1683万頭 鶏肉：7億3290万羽）、食品ロス（令和2年度 522万トン）などのデータを提示し、動植物の生命の尊さについて深く考えられるようにする。

【終末の工夫】

終末では、先人の言葉（A.シュバイツァー「自分は生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」と、金子みすゞ「朝焼け小焼け 大漁だ 大羽鯛の大漁だ 浜は祭りのようだけど 海の中では何万の鯛のとむらいするだろう」）を紹介し、主題である「生命を大切にすること」はということかについて、個人で振り返りを行い、本時の学びを共有する。

■ 板書計画

